

フィリピン村落工業における開発の失敗

— 人類学的視点からの試論

永井博子

キーワード

開発 村落工業 地域文化 ディスココース

はじめに

ノーランは、開発を「貧困とそれに関連した社会悪を解消するための世界的な努力」と要約している (Nolan 2002, p. 28)。国境を越えた開発産業は、第二次世界大戦後、IMF や世界銀行の設立とともに始まったが、これは同時に、「貧困」や援助される側としての「第三世界」という概念そのものの創出であった。エスコobarによれば、「貧困」は、戦後においていわゆる「先進諸国」による「アジア、アフリカおよびラテンアメリカにおける大量の貧困の発見」があり、一九四八年に世界銀行が国民一人当たりの年収が一〇

〇ドル以下である国を「貧困国」と定義にしたことに始まる (Escobar 1995, pp. 21-24)。それ以降、開発産業は世界全体を包み込んで国際市場を形成し、国家間に決定的な政治関係を作り出してきたのである。

人類学における開発研究では、開発が「西洋」と「その他」(Hall: 1992) という極めて根源的な二項対立の規範に基づいて行われてきたことは、すでに合意されているといってもよい。「第三世界」、「開発途上国」などの用語の背景には、欧米諸国を最先進とする明確な単系的進化論がある。一九八〇年代の開発産業における転換、すなわち、それ以前のマクロレベルでの経済発展から利益の公平分配、産業

化から基本的ニーズの充足、中央集権型の計画実施プロセスから参加型プロセスへとという転換を経て、この二項対立のディスコースはそのまま持ち越された。

開発は、第一に、異なる文化が遭遇する場である。開発計画は、外部から対象者である地域社会へとやってくる。開発計画は、一定のプロセスを経てできあがった文化システムであり、いうまでもなく地域社会の文化とは異なるものである。開発計画の実施は、特定問題の解決という前面に掲げられた目的だけではなく、この二つの文化の交渉というレベルを持っている。二つの文化は、目標や価値観、文化規範などを巡って対立し、競合し、あるいは妥協する。第一世界の論理を持ってやってくる開発は、圧倒的な力に対象となる地域社会を「開発されるべきもの」という位置に固定し、開発の計画者が考える生活の質の向上というものを地域社会に指し示す。開発によって貧困を解消しようという善意を前に、地域社会の人々には、開発そのものに対する選択権はほとんどないといってしまう。

人類学の領域における開発研究には、現在、開発というコトバ、およびそれが意味するものを脱構築化し、その中に示される力のあり方を明らかにしようという流れと、より実践的に開発産業が抱えている問題の解決に貢献するという応用人類学の流れがある。その中で、現在、研究の焦

点となっているのは開発ディスコースの分析であろう。ディスコースは「言う、行為する、考える、評価することの組み合わせ」(Gee 1990, p. 174)であり、それによって「意味」を作り出す場の基盤となるものである。開発産業に備わった欧米社会のディスコース、つまり欧米社会の知と力の存在を認識することは、開発それ自体の矛盾を浮き彫りにすることでもある。ポスト開発論およびアンチ開発論では、開発とは、外部から持ち込まれた文化システムが支配的となり、地域社会の文化が置き換えられていくという状況に他ならない。ここには、開発という概念の存在自体が否定的であるというイデオロギーがある。これは言語学の分野で、ジーが、支配的なディスコースがその正当性を主張するとき、「それ以外のディスコースを周縁へと追いやり、ディスコース間に階層を存在」させるものであるといっているのに一致する (ibid.:, p. 144)。

これに対して、オルタナティブ開発論では、開発と地域文化は補完しあうべきものであり、それによって貧困問題の解消という開発本来の目的に近づくというポジティブな立場がとられている (e.g. Pieterse 2002)。現在の開発ディスコースがエスノセントリズムに支配されているがゆえに、それを認識し、よりよい開発を目指すために、新しい開発倫理の必要性を強調する立場もある (e.g. Mehmet 1999)。

オルタナティブ開発論のポジティブな視点は、地域文化を周縁化・階層化される一方の受動的なものとするのではなく、外からの勢力に対抗し、それを変容させ、また、自らも変容していくものととらえることから生まれる。ビッグは、ネパールにおける村落開発において、開発という概念自体が、地域文化の中で「ネパール化」した新しいディスコースとして生起し、国家の描く開発、すなわち近代化の新しい景観の中で、人々が自分の位置を測定するための「社会地図」としての役割を果たしていることを示した (Piggis 1992)。

フィリピンでも、国の隅々にわたるまで、開発が景観を変えてきたことはいままでもない。その変容は、地理上の景観から人々の精神風景まで、多様な場面で起こっているといえよう。フィリピンにおける開発ディスコースが、ピッグが描くような、ローカル化され、変容したディスコースであるかは、現在のところ明らかではない。しかし、村落レベルにおいては、開発という異文化の遭遇は、様々な形をとって顕われており、対立、競合、そして変容の過程も一様ではない。開発は、フィリピン村落におけるハイブリッド性を、さらに複雑にする要因のひとつとなっているのである。

本論でとりあげるフィリピン農村における二つの開発の

事例では、村落をベースとした産業に対して開発プロジェクトが繰り返し導入され、そして繰り返し「失敗」したという評価を受けてきた。応用人類学者ノーランは、開発における失敗は、多くの場合、財政面や技術面、さらには援助する側の善意の有無に原因があるのではなく、計画された変化と地域文化のコンテクストの間に合致が見られないことにあると述べている (Nolan 2002, p. 21)。この二つの事例は、村落産業に対する開発、しかも、既存の技術と資源を利用した参加型の産業開発という点では同じなのであるが、それぞれがたどった経緯は一樣ではなかった。本論は、まず、開発が地域文化のコンテクストの中でどのように「失敗」となるに到ったのか、つまり、文化遭遇における不合致はどこにあったのか、そして、開発が指し示す変化に対して、二つの村がどのように対応しているのかを明らかにすることを目的とする。

本論で使った資料の大部分は、一九九九年から二〇〇三年にかけて、筆者が地域内で拾い上げ、フィールドノートに書きとめておいた断片的な情報である。また、組織内の異動のため、インタビューができなかったプロジェクト担当者もあり、従って議論のための材料は十分とはいえず、本論は試論といふべきものである。筆者が調査地の言語であるキナライア語を母語としないことはいうまでもなく、

フィリピン村落工業における開発の失敗（永井）

インタビュはフィリピン語の媒介を通して行われる場合もあった。ゆえに、相互の理解がどの程度のものであったか、その科学的確証性を査定することは難しい。本論の議論は、この点でも限られたものである。

一 アンティーケという土地

本論で取り上げる地域はアンティーケ州、フィリピン中部ピサヤ地方に属するパナイ島の西岸に位置する。州政府を始め、行政関係機関の職員に対する筆者のインタビュでは、アンティーケを形容するコトバとして必ず出てきたのが、「most depressed」と「アスワン (aswang)」である。英語で言われるdepressedの意味は、しかし、話者自身にとっても明らかではなく、漠然と経済的な貧困を指していることが推測されるのみである。このコトバは、世帯当りの平均年収がフィリピン七四州中五九位と低く、海と山に包囲された州内には、小規模農業と漁業以外、特に誇るべき産業がないことに関係しているらしい。一方、アスワンは、フィリピン民間信仰に属する存在で、隣人の血を吸い死に至らせるなどの悪業を行う妖怪である。このコトバは常に笑いととも口に出される。アンティーケ州を含むパナイ島の北部は、特にアスワンの多い地域といわれるが、

実際は、アスワンのような「迷信」を信じる人が多い地域という揶揄を言外に含む。これらのコトバは「貧困」と「迷信」を示し、さらに「後進性」「閉鎖性」のイメージへと繋がっていく。

一方、公式の統計資料では、この地域が「天然資源が豊富（観光資源を含む）であることが繰り返して述べられている (Philippines, Province of Antique 1982, pp. 7, 12; Philippines NSO 1996, p. 1)」で使用されているrich(豊富)というコトバは、当然のことながら貧しさの反意語である。しかし、この豊富な天然資源は潜在的資源として存在しているのであって、「未だ開発されていないもの」「すなわち「開発されるべきもの」として提示されており、先の「貧困」のイメージを覆すには至っていない。つまり、ここで見る限り、「貧困」「後進」そして「未開発」、そしてそれに繋がる語彙が、州政府が投影する公式のイメージを形作っているといえる。

一九八二年の州政府統計資料には、USAIDの援助を受けたパナイ統一保健奉仕プロジェクト、およびフォード財団と州政府の共同によるアンティーケ山地区開発プログラムなどが挙げられている。一九八〇年には、州都をベースとしたアンティーケ総合地域開発基金、略称ANIADが創設され、州内の開発事業を総括するようになった。ANIADは、

州政府やその他の行政機関、地元のNGOなど様々な関係組織からの代表者と国内外の開発の専門家で構成されている (cf. Jopilio 1996)。フィリピン政府からだけではなく、オランダ政府からの援助をも活動資金としてきたため、住民一般にはオランダのNGOという認識がある。豊富な活動資金、専門知識、国際機関であること、そして政府関係者をはじめとした多様な構成メンバーといったファクターは、開発に関するかぎり、ANIADを州政府の上位に位置づけ、それと同時にANIADの存在は「開発途上」である州を象徴することとなったのである。

このイメージはイメージとして、ファーガソンがレソトの事例 (Ferguson 1994) で示しているのと同様、アンティーク経済は均質的な自給自足の経済では決してない。人々は、一九世紀後半から甘蔗プランテーションへの出稼ぎ労働を始め、貨幣経済に巻き込まれてきた。一九六〇年代以降は首都圏との間に大量の出稼ぎ労働者が行き来し、首都圏からの送金は地域経済の一部となった。出稼ぎの役割が近代化論でいわれているような楽観的・啓蒙的なものならば、アンティークの近代化のレベルはかなり高いといわなければならないはずである。七〇年代には稲作農業改革によって州内の農業が一新されて、農業センサスによれば、農地の八五パーセント以上が稲作に当てられている (Philippines

NSO 1996)。米は州内で消費されるだけではなく州外でも販売されて、稲作は州第一の産業となっている。

アンティーク社会における階層化の指標の一つは、いうまでもなく都市部と農村部の対比であるが、農村部では、さらに平地部と山地部の対比がある。平地・山地の区別は、地理的相違だけではなく、それに伴うエコシステムの相違を含み、陸稲や根菜類を主な作物とする山地部農業と、水稲栽培を中心とする低地部農業の相違をも指している。一九六〇年代終りから始まった『緑の革命』²⁾は、平地部農業に有利に働き、両者の経済的格差を広げた。「貧しい」州の中において、平地部との比較において山地部は「より貧しい」地域として位置づけられることになったのである。³⁾

さらに、この世界的規模の開発プロジェクトは、「知識」 (World Bank 1999, pp. 16) という点で別の階層化を行った。つまり、品種や施肥、除草、農業機械など、革新技術に関する様々な情報と知識が、主要な働き手である (と考えられた) 男性を対象として伝達普及されたことである。その結果、平地部農村の女性たちは「主婦」というカテゴリーに置かれることとなった。⁴⁾しかし、実際には、男性労働者がひとりで行える作業、すなわち機械化された耕起作業と種播、および化学除草剤による除草作業以外の農作業には、女性たちも労働者として参与しているばかりではな

フィリピン村落工業における開発の失敗（永井）

く、米以外の野菜栽培や家畜の世話などは、主に彼女たちの手で行われているのが実情である。『緑の革命』による「知識」の普及は、「稲作」主要な生産活動「自作農の男性」を中心に置き、農作業における労働時間の長さや量にかかわらず、それ以外の労働および人々を相対的に「残余的」「補助的」というカテゴリーに位置づけたのであった。

水稲栽培を州の経済の中心におき、水稲栽培のできない山地区を一連の開発プログラムの対象とし、さらに潜在的失業者となった女性と賃金労働者には、家内工業振興という開発計画が振り当てられた。フィリピン政府は、一九六二年に家内工業開発局（略称NACIDA）を設立し、七〇年代初めには、製造業主導の輸出志向工業化の方向を採る国家政策との関連で、中小規模の製造業でも輸出向け生産が奨励された。一九八六年以来、国家開発計画では、フィリピン産業化は在来産業の活性化を重視し、また、貧困を減じ、開発による利益を公平に分配することが一貫した姿勢となり、現政権の中期開発計画も、中小規模事業（略称SME）を「貧困および経済格差解消への鍵」と呼び、さらに最終的にグローバル経済へと連繋していくもの（Philippines, Office of the President 2001, pp. 45-46）として、より一層の積極的な役割を与えている。二〇〇二年には、また、村落零細事業法（略称BMBE法）として知られる共和国法

が制定され、村落産業ははっきりとグローバル化のコンテンツの中で語られることになったのである。⁽⁵⁾

本論で取り上げるバリ村の土器作りもマラポール村の織物も、農村部世帯の「副収入源」という位置づけにある産業で、農村部BMBEの典型といっていいかもしれない。農村研究における非農業生産活動や多就業性への注目を俟つまでもなく、これらの産業は、産業として独立して運営されているのではなく、他の生産活動との組み合わせにおいて存在している。そして、その主要な担い手は、農村における水稲栽培を行う農家以外という広範囲なカテゴリーに属する人々、つまり農業労働者や農業以外の賃労働者、山地部農民、漁業労働者などで、さらに、そのほとんどが女性である。⁽⁶⁾このふたつの産業は、継続的に開発計画の対象となり、そして以下のような経緯をたどったのであった。

二 村落産業に対する開発プロジェクト

(1) バリ村の土器作り⁽⁷⁾

バリ村の土器作りは、その起源は不明であるが、少なくとも戦後から現在まで続いており、シーンズによる一九六八年の調査では、当時バリ村の陶工は五二人、州内では陶工数および生産量において最大であった(Scheans 1977, p.

83)。村は、州内随一の広がり誇る水田の中にこんもりと盛り上がる丘の上にある。人口七四四人（一九九五年シバロム町統計）、世帯数の半数が農業に従事しているのに対し、土器作りをする世帯は、一九九九年で三二世帯、全体の二八%に当る。陶工たちは組合を組織しているが、製造も販売も、すべて個々の世帯で行われている。販売は火曜日に立つ町の市場に持ち込むこともあるが、それよりも個人的な注文をとる方が取引は大きい。製品は、調理用コンロや土鍋、植木鉢、花瓶、水瓶など一一品目がある。三二世帯中、土器作りだけで食べているのは一世帯のみ、他は小作農、農業労働、漁業、建設労働など、土器作り以外の収入源がある。陶工三六人中男性は四人のみで、他は女性である。技術は母から娘へ、オバから姪へ、姑から嫁へ、あるいは隣人の陶工から習うといった形で伝えられてきた。

通産省アンティーケ局とアンティーケ州立工芸大学、および陶工へのインタビューを総合すると、バリ村土器作りに関連した開発計画は、①アンティーケ商芸学校の薪窯建設および技術指導、②フィリピン通産産業省（以下、通産省）によるバリ村土器製造者組合の設立、③オランダ政府援助による窯築建設、④陶工を対象とする一連の技術研修、⑤ANTADによるアンティーケ陶器工房とレンガ生産計画の五つである。

バリ村の一角に敷地をもつアンティーケ工芸大学は、職業訓練を目的とするアンティーケ商芸学校として一九五四年に創立された。商芸学校では、創立に先んじて州内で調査を行い、それによると電気製品組立修理や洋裁、食品加工などの通常の科目をしのいで、陶芸に対する要望が最も高かったという。創立当時、重油を燃料とする窯が設置されたが、一九六五年には薪窯および作業場が新設され、日本から陶芸専門家も到着して指導に当たった。一般には、建設費用は日本からの援助であったと伝えられているが、これはフィリピン政府が国内で分配した日本の戦時賠償金の一部であったと見られる。陶芸科設立は、当然のことながら、同じ村内の土器作りと無関係ではなかった。バリ村の若い世代に陶芸に関する総合的な教育の機会を与え、さらに村の陶工に窯の利用が奨励された。陶工の子供たちでは陶芸科に進む者もあつたようであるが、窯利用の方は、経費が利用者負担となつていたため、試してみようという陶工はいなかった。

全国レベルでの陶器産業は、一九八〇年代に転換期を迎えた。通産省が陶器を輸出奨励品目としたのに応えて一九八四年に陶器製造輸業者協会が設立され、一九八六年には、フィリピン陶器産業全体がヨーロッパ共同体の助成による技術開発計画の対象となつた(Philippines, DTI 1995,

フィリピン村落工業における開発の失敗（永井）

p. 28)。バリ村でもこの動きに合わせて、バリ土器製造者組合が通産省アンティーケ局主導で正式に発足した。開発産業における「上からの開発」からの参加型への転換も反映して、組合は陶工たちの自主運営が原則で、まず、通産省の援助を得るために、開発計画書の執筆と提出が課せられた。これによって、組合は八四年、八五年と二回にわたって通産省の援助を受けたが、具体的な成果を上げずじまいだった。開発計画は「新しいデザインの製品を開発する」というものだったらしい。

組合は自主管理の一環として、価格統一と品質管理を行ったが、これは陶工たちの不満を買った。組合の示した価格は、陶工が個々人で取引する値段より低く、また、ひびの入った製品はもとより、修理した品も不合格とする管理は、陶工たちのそれまでのやり方とは異なるものだった。一方、組合員に対する短期の少額ローンは歓迎されたが、土器作りではなく世帯内の経済問題解決のために使われたローンの多くは返済されず、組合は次第に活動資金を失っていった。

一九八七年には、ANIAD、町役場、組合の三者によって、村内に糞を燃料とする窯を三基建設し、共同使用に当てようという開発プロジェクトが計画され、オランダ政府の援助を受けることになった^⑩。ところが、窯を設置する場所が

選ばれ、測量が行われて、オランダ大使が視察に来た後、プロジェクトは立ち消えになった。その理由は明らかではなく、援助金使い込みの噂だけが残った。誰がどのように使い込んだのか、援助金の管理責任は誰にあったのかが追求されることもなかった。これを契機として、組合はわずか三年で機能を失い、名ばかりのものとなった。

一方、アンティーケ商芸学校は、州住民のニーズを反映して、学校の方針を職業訓練から高等教育へと切り替え、一九八四年にアンティーケ州立工芸大学に昇格した。この前後から陶芸を専攻する学生の数は減少し、それに伴って陶芸科の予算も制限された。まず、燃料のコスト高を理由に重油窯が使用中止となり、薪窯でさえ燃料の調達が難しくなった。この頃、日本の国際協力事業団のプログラムを通じて、講師三人が陶器製造研修のために愛知県へ送られたが、陶芸科は先細りするばかりだった。

一九八九年、通産省は全国的な陶器およびレンガ生産開発計画を構想し、それを受けて各地で事前調査が行われた。アンティーケ州では、アンティーケ陶器工房設立計画が提出された。これは陶器製造販売を行う事業組織を設立し、工房と販売店を持つプラントをバリ村の隣村に建設するというもので、商品開発や市場開拓の役割も担い、州内の土器・陶器産業のショーケースとなるはずであった。これは

同時に、通産省の計画に対応して、レンガ生産を奨励するものであった。工芸大学の専門家たちは、一九六〇年代からレンガ生産に期待をかけて、その導入に務めていた。レンガ生産には熟練技術は必要とされず、しかも量産が可能である。そして、建材として様々な用途があり、土鍋や鉢より広い市場が見込まれた。それまで、バリ村の陶工も、注文に応じてレンガを製造することはあったが、個人で注文を受け、個人で作るのが原則のバリ村では、量産は難しかった。工芸大学が校門建設のために注文したときは、陶工たちは共同で働いたが、彼女たちにとつて、それが最初で最後の共同作業の経験であった。工房設立計画は、しかし、実現しなかった。一九九〇年のANIADの事前調査報告書は、伝統的品目に関して需要が供給を大幅に上回り、将来も成長が見込まれるのに対し、州内にはレンガ市場は皆無であり、今後も可能性があるとはいえないと結論し、これに従って計画は却下されたのである。

バリ村陶工を対象とする技術研修は数回行われたようであるが、工房計画が却下された後に行われた一週間の研修が、バリ村土器産業に対する開発プロジェクトの最後のものとなった。技術研修では、在来の手回しロクロに対する蹴りロクロ、叩き作りに対する型作り、素焼きに対する釉薬使用が紹介され、実習が行われた。この研修は通産省と

工芸大学の協力によって実施され、陶工の大半が研修に参加した。しかし、彼女たちは新技術に積極的な興味を示さず、唯一好意的な反応があったのは彩色した置物であった。それは型で作り、彩色ののち釉薬を施した物だったが、陶工たちを引き付けたのは、素焼きのバリ村産品にはない色どりと装飾性であった。しかし、結果としては、通産省の主眼であった蹴りロクロと型作りの導入は一顧だにされず、バリ村の土器作りのその後何の影響も与えなかったのである。この研修以後、通産省はバリ村を開発援助対象からはずし、新たに州中部の別の村における土器作りプロジェクトを開始した。

一方、工芸大学では、一九九七年に専攻学生が皆無になったことを理由に、陶芸科は閉講となった。その四三年の歴史で、卒業生を陶器会社に二名、バリ村の土器産業に一名送り出したことが主たる成果として残った。

(2) マラボール村のピニヤ織り

日常雑器であるバリ村の土器に比べると、マラボール村産品のピニヤ布には、よりドラマチックな歴史がある。ピニヤ布はパイナップルの葉からとった繊維の織物で、向こうが透けてみえるほど薄くて繊細な生成りの布である。このピニヤに刺繍を施したものはフィリピン人の誇りであり、

フィリピン村落工業における開発の失敗（永井）

最高級の民族衣装に使われる。一九世紀後半、アンティケ州を含むパナイ島全体が織物の一大生産地であった時期があり、ここで織られた美しい布は、フィリピンの主要な生産品としてヨーロッパ、アメリカ、中国などに出荷された。絹やアバカ、綿などの様々な製品の中にピニヤ製品もあり、その美しさは国内外の市場で賞賛を浴びたという。しかし、その盛隆は長く続かず、隣島ネグロスでの砂糖産業の興隆と引き換えに、一九世紀末にはパナイ産織物すべてが輸出品目リストから消えていったのである (McCoy 1982, pp. 301-302)。

アンティケ州の織業では、一八七〇年に、州内に三、七三機の手機があったことが記録されている (Fornier 1997, pp. 420-421)。輸出向け生産が途絶えてからは、フィリピンの織業の主流が工場における大量生産となったこともあり、手織り布は、伝統的衣装であるパタジョンやバロンに使うものなどを、州内消費向けに生産する程度に細々と続けられていたと推測される。織り手たちへのインタビューによれば、第二次世界大戦前は綿やピニヤも織られていたが、戦時中はおっぱら軍服用としてアバカ織りが奨励されたという。しかし、それも戦後は衰退し、一九九五年にマラボール村でピニヤ織りが始まったとき、州内で織りの知識を持つ人はごくわずかだった。

ピニヤ開発計画がどのように始まったかについては、関係者の中でもいくつかの説があるが、その背景には州内でも一九六〇年代に始まった協同組合運動がある。これは組合員が共同出資して合同資金を作り、必要の際に貸付けが受けられるようにするというのが共通した機能で、一九六八年には、州内各地の協同組合を統括するために、アンティケ協同組合連合（略称AFCCUD）が設立された。マラボール村のあるティビヤオ町では、まずティビヤオ協同組合ができ、その活動の中で農村部女性のエンパワーメントを目的としてピニヤ織りが始まった。そのきっかけは、政府軍と反政府ゲリラの抗争で難民となった山地部からの疎開者の中に、織りの技術を持つ二家族があったことである。その製品が当時の州知事の夫人の目にとまり、彼女の肝いりでピニヤ開発計画が構想されることになった。

最初に町の中心部に近いカロオガン村に集まった織り手たちのグループは、しかし、短命で終わった。次に、織り手のリーダーとみなされるジェマ・トムリンが組合長となつて、場所をマラボールに移し、マラボール村ピニヤ生産者組合が新たに発足した。ANIADが手機の購入費と作業場の建築費を受け持ち、通産省および農業省持統的農畜産局略称SCLDのアンティケ局が技術援助と産業経営のモニタリングを担当することとなった。また、販売は、州政府投

資振興センター、そして地元NGOであるアンティーケ開発基金とAFCCUIIが受け持った。科学技術省も半自動の織機を試験的に持ち込み、合計七つの組織を巻き込んでマラボール村のピニヤ開発ははじまったのである。

戦後、ピニヤの主要生産地はアクラン州の州都カリボで、現在は三〇を越す製造業者が集中している。アンティーケ州のピニヤ開発計画が最初に行ったのは、カリボ市で手機を購入することと、織り手たちをカリボに技術研修旅行に連れて行くことであつた。その一方、マラボール村での織維生産に備え、パイナップル栽培のための土地を確保し、組合員の希望者に、織維加工および糸結びの技術指導を行つた。織り手の数を増やすための織りの技術指導も行われた。マラボール村のピニヤ織りがスタートに当って、栽培者以外の組合員全員が「トレーニング」を受けたのである。一九九六年には、織り手は山地部出身者七人に加えて、新たに習得した平地部出身者八人、織維加工と糸結びは七五人になり、組合員数は一一四名に達した。組合員は、全員が低所得層に属する農民、漁民、農業労働者、建設労働者、サカダ、失業中のどれかに相当する人々であつた。

マラボール村ピニヤ生産者組合の活動は、二〇〇〇年までは順調だったようである。毎年、技術研修を行い、その合間には作業能率の査定があつた。組合は、作業をした者

に決まったレートで労賃を払い、その額は決して大きくはなかつたが、他の雇用機会や世帯経費などの関係からみて、組合員を織業にとどまらせるだけの魅力を持つていた。大口の買い付けもあり、これは組合にかなりの利益をもたらした。また、協同組合の伝統である組合員への貸付けも行われ、これは歓迎された。二〇〇〇年、組合はその製品を首都で行われた見本市に出すことになつた。これは、地方の零細および小規模産業を振興し、市場拡大の機会を与えることを目的として、通産省を始め一四の関係組織の協賛で行われているもので、この年、組合はAFCCUIIの名で、全国から集まつた二一七の製造・販売業者とともに製品を展示した。このうち、ピニヤ製品を扱っていたのは三業者のみであり、他の二業者はカリボから来た人たちであつた。マラボールのピニヤは人目を惹きつけたが、結局、もう少しで成立しそうだった海外のフリーピン工芸品商との取引を断つたという事実だけが、見本市参加の結果として残つたのである。注文の量を確保することがむずかしい、というのがその理由であつたが、このことは、アンティーケのピニヤ開発計画関係者の大きな失望となつた。組合が翌年の見本市に、再度参加することはなかつたのである。

二〇〇一年、関係者の合意で産業組織の再編成が行われた。組合はマラボール村およびその他の一一村からの参加

フィリピン村落工業における開発の失敗（永井）

者で組織されて、名称もティピヤオ町ピニヤ生産者組合となり、首都の大学で学んだ経験のあるサルバシオン・ピアンコが組合長に選ばれた。マラボール村の織業はそのままであったが、新しい組合員のほとんどはバイナツプル栽培者で、バイナツプル作付地は一九九五年の〇・七五ヘクタールから一・二ヘクタールへと拡大した。

この新組合は、最初から問題を抱えてスタートした。第一は、AFCCUIからの借入金の返済である。これは組合の利益の中から返していくべきローンであったが、そのような仕組みを理解し会計作業のできる者はいなかった。返済日が来ると、組合の運転資金は組合員の貸付けに雲散霧消しており、それまでの利益からの積み立てもなく、多額の負債だけが残ったのである。第二に、カリボのピニヤ織業との市場競争がある。カリボの織業がビジネスの論理で動いているのに対し、マラボールの開発計画の目的は収入源の創出であり、基本的ニーズの充足である。マラボールの織り手が受け取る賃金はカリボの相場よりも高く、他方、製品の売値は同程度であったため、外部からの援助で操業してきた組合には不明瞭であったが、その誤差は次第に積み重なっていった。また、企業家が管理するカリボの製品との品質の差が大きいことも、アンティーケの関係者には認識されていないようであった¹³。第三に、組合は六年

間に市場を拡大する手段をついに持たなかった。見本市参加は失敗に終わり、州政府投資振興センターとアンティーケ開発基金も、それまでの商品見本の展示を止めていた。AFCCUIにもバイヤーからのアプローチを待つ以外、積極的に販路を拡げるノウハウがなかった。つまり、新組合と成っても、販路拡大の見通しはまったくなかったのである。AFCCUIは、財政上の問題を少しでも解決しようと組合の労賃引下げを行ったが、これは組合員の激減を招いた。織り手は五人となり、繊維加工者は四〇人に減った。未婚の若い女性メンバーの多くは、家事労働者として都市部に出稼ぎにいった。

二〇〇二年に村落零細事業法が發布され、この共和国法の下で『一町一産物一〇〇万ペソ』プログラムが始まると、町村レベルでの産業振興は地方行政の仕事となった。それまで州内の様々な村落産業を援助してきた通産省アンティーケ局は、このプログラムによってその業務を地方行政に移し、モスコバード糖生産だけに集中することとなった。ピニヤ生産者組合は、財政面ではANIADの援助を引き続き受けながらも町役場の管理下に入り、新しい体制をとることになった。ピニヤ開発計画は、正式に村役場ANIAD・AFCCUI農業省持続的農畜産局の四者によるプロジェクトとなったのである。

町役場が農業省ティピヤオ町局の協力で計画したのは、新しい織場の建設と、町全域へのパイナップル栽培の拡大である。しかし、この変化はマラボール村のピニヤ織業に一時的な停止をもたらした。まず、賃金が支払われなくなり、新しい織場の完成を待つ間、手機はしまいこまれ、元の組合員は新しい組合に参加するかどうかの意志決定を迫られた。この間、町役場は新組合員を対象に、二〇〇二年には「チームワークおよび能率向上トレーニング」、二〇〇三年には刺繍と染めの技術研修を行った。組合長は残っている製品を集めて「AFCCUI」ともに、二〇〇三年の一月、首都における見本市に参加した。しかし、組合長とAFCCUIの間で販売価格の折り合いがつかず、AFCCUIの主張する価格から値引きすることができなかったため、再度、バイヤーをつかむことができずに帰郷することとなった。この時点で、村役場とANIADが財政援助、農業省が技術援助という役割分担は合意されていたが、組合が賃金と販路拡大に責任をもつことについては、何の見通しもなかった。AFCCUIと組合の関係における齟齬は決定的で、AFCCUIはピニヤ製品の販売に関して関知しないことを決定した。

一方、農業省のパイナップル栽培奨励はうまくいき、非組合員も合わせて、町内の作付面積は四ヘクタール、栽培者は一四一名となった。ここにおいて、ピニヤ開発計画に

は新しい動きが出てきた。企業家の参入と果実を目的としたパイナップル栽培である。町中心部に住む小地主で非組合員の女性が、カリボの業者と取引して、未加工のパイナップルの葉を大量に売りさばいたのである。繊維加工という地元での雇用機会創出を目的とし、加工済み繊維の販売を考えていた開発計画関係者には、これは予想外の出来事だった。また、組合が買い上げのことを当てにしてパイナップル栽培を始めた農家では、組合の操業が停止したために葉を売ることができなかった。葉は見捨てられ、これらの農家は代わりに果実を地元の市場に運び込んだのであった。こうして、ピニヤ開発計画は、当初の計画とはまったく別の形をとることとなったのである。

三 持続する土器作り、変容するピニヤ織り

バリ村土器作りとマラボール村ピニヤ織りでは、その開発計画は、①在来の技術と資源をベースに始まったこと、②技術導入、融資、人材開発のすべての要素がそろっていったこと、③前回のプロジェクトの失敗を補う形で次のプロジェクトが計画され、援助が継続的であったことが共通してみられる。また、計画の対象が農村において社会経済地位の低い層の人々で、その中心が女性だったことは、これ

フィリピン村落工業における開発の失敗（永井）

らの人々に対するエンパワメントという開発産業全体の目的に合致していた。基本的ニーズの充足、利益の公平分配、さらに組合による自主管理や組合員自身によるプロジェクト計画および申請書作成などには参加型のプロセスをとり、これらの点においても、二つの村における開発計画は、開発産業の動向を忠実に反映していたといえる。

二つの産業の相違点に関しては、ごくおおまかに、表のような対比が見てとれる。まず、バリ村の事例でいえるのは、開発計画が始まる以前から、土器作りが在来産業としてしっかりと根づいていたということである。土器作りの位置づけは、「貧困世帯（平地部自作農以下）」の「主婦（前述の農家の既婚女性に対するカテゴリー）」の仕事である。陶工たちの多くは、子供の頃に母親や祖母が土器作りをしているのを見て育っている。しかし、未婚のあいだはそれを自分の仕事としようとする者はほとんどなく、むしろ村の外に目をやって、ハイスクール卒業後は出稼ぎ労働者として都市部に働きに行くというのが現在も続くパターンである。そして、自分が結婚して村に落ち着き、世帯経営を始め、収入に不足があるという状況になって初めて、土器作りに目を向けるのであった。

彼女たちの第一の関心は、基本的ニーズの充足である。陶工世帯の大多数は夫が農業労働者か小作農で、夫は米の

表 2つの村落産業における相違

	バリ村土器作り	マラボール村ピニヤ織り
技術習得	親族縁者や隣人からの習得、および「イクスペリエンシヤ」（経験）	「トレーニング」（技術研修）
製造場所	個々人の家	「センター」（協同作業場）
主な収入源	週市での販売および「オーダー」（注文による製造販売）	「サホール」（組合からの賃金）、「フルタイム」「パートタイム」労働者の賃金格差
販売戦略	新製品開発	見本市への参加
ターゲットとなる市場	州内市場	国際市場

確保をし、妻は現金収入を得て共同で衣食住の費用を確保するという形をとっている。アンティーケ州では、基本的ニーズを満たして子供に初等教育を受けさせるには、月におよそ三〇〇ペソが必要といわれる。陶工たちの収入は、平均して月に一〇〇〇〜二〇〇〇ペソとなり、彼女たちはなんとかこの中から、子供をハイスクールや大学にまで送り込むほどの経済的余裕を生み出しているのである。このことを、陶工たちは「子供はコンロや土鍋のおかげで学校に行っている」と表現している。

土器作りを始めるとき、彼女たちは自分でロクロや叩き板、その他の必要な道具を調達し、陶土の採れる田の持ち主と交渉して、鉢や土鍋などとの物々交換で陶土を確保し、同じく現品払いで燃料となる藁を手に入れる。その過程は個人作業である。そして、自宅の土間で土を捏ね、ロクロをまわす一方で、赤ん坊に授乳し、子供たちの世話をする。こうした技術や知識、作業環境の設定は、すべて「イクスペリエンシヤ（経験）」であり、彼女たちの社会関係の中で均衡の取れたシステムとして機能してきたものであった。また販売に当たっても、どの品をどれだけ作り、週ごとの市に運び込むかは陶工自身の判断により、注文を受ける場合でも、個々の陶工が自分の能力を判断して注文を受けるかどうかを決定する。品目、量、納期について買い手との間

で合意しない場合は、別の陶工に注文を譲ることになる。筆者がインタビュの際に大多数の陶工から聞いた「イクスペリエンシヤ」というコトバには、製造技術だけではなく、販売方法や顧客のネットワークまで、地域社会の中における産業の存続に関わる様々な知識が含まれているのである。

先に挙げたアンティーケ陶器工房計画の事前調査では、州内では伝統的品目について需要が供給を大幅に上回り、将来も成長が見込まれるとしているが、陶工のコトバでいえば、作ったものが長く売れ残るということは減多になく、特に調理用コンロは、五―六月の異動期には製造が間に合わないほどよく売れる。しかし、バリ村の陶工たちは、伝統的品目だけに固執しているのではない。従来の薪コンロに対し、都市部世帯での需要が増加する木炭コンロには、プロパンガスの商品名から借用した「シイリン」という名前がつけられている。「盆栽」の流行にもすばやく対応し、従来の丸型植木鉢と並んで、平たい角型の「ブンサイ」鉢も生産されている。技術研修の際に陶工が興味を示したカラフルな置物は、彼女たちが州外を旅行したときに見たのと同じ種類のもので、専門家の目的は確にその市場性を見抜いていた。

総じてバリ村の土器作りは、開発計画以前に、産業とし

ての持続性を十分に持ち合わせていたといえる。では、開発はなぜ計画され、そこにはどのような役割が期待されていたのであろうか。バリ村の土器作りを対象とする開発プロジェクトのすべてに共通しているのが、「量産」と「均質」というゴールである。道端で行う露天焼きよりも、薪窯や藁窯はより大量の製品を一度に焼くことができ、しかも均等の焼き上がりになる。蹴りロクロや型作りも、製造工程のスピードを上げ、製品を均質にするものである。この目的を的確に表しているのが、計画段階で却下されたアンティーク陶器工房とレンガ生産プロジェクトである。開発産業側の理論では、土器（陶器）産業の興隆には大量生産と市場拡大が必須である。建築資材としてのレンガはこの条件に合致していた。また、量産と市場拡大を実行するにはそれに対応できる事業組織が必要であり、バリ村土器製造者組合がその任ではないとの判断から、工房設立が計画されたのであった。その意味では、工房設立とレンガ生産は、州内の陶器産業の将来が託されるはずのものであった。

しかし、陶工の視点からは、現状以上に生産量を増やすことは、必ずしも必要なことではない。彼女たちにとつては、セメントの家を建て、子供を大学に入れることが経済的水準向上を追求する最終的な目的である。しかし、土器作りが着実に利益を上げているかぎり、それは現状維持で

も不可能なことではないのである。さらに重要なのは、レンガ作りの提案が、陶工たちを未熟労働者とみなしていたことであつた。ロクロや叩き板、磨き石の使い方を知らなくても、レンガは一定のプロセスをたどれば誰にでも作ることができる。この開発プロジェクトが提案したのは、工房という事業体の下に、陶工たちを賃金労働者として共同作業の中に組み込むことであつた。独立したアルチザンの知識と技術、誇りと充実感を無視し、既存の産業構造を根こそぎ変えようというのが、この開発プロジェクトが提案した「産業振興」であつた。

これと対照的なのが、アンティーク工芸大学の陶芸科を卒業したバリ村陶工の例である。彼女はバリ村に生まれ、幼い頃から土器作りに興味を示し、大学では特に選んで陶芸を専攻した。しかし、卒業後は、日本の陶器産地への留学も陶器会社への就職も実現せず、結局、村の陶工のひとつりとなつた。彼女によれば、伝統的技術による従来の品目はよく売れ、学校で習った別の技術や新しい品目を試みる余地はないし、そのつもりもないという。ここでは、彼女が大学教育で得た専門技術と知識は、地域社会の現実との遭遇において不必要なものとされ、廃棄されたのである。

一方、ピニャ織りは、開発計画以前に織りの技術は存在したが、産業として成立していたとはいいがたい。しかし、

一九世紀後半におけるアンティーク織業の隆盛、国際市場でその製品が売買された歴史、パイナップル栽培に適した土地柄と繊維自給の可能性、そして何よりもフィリピン工芸品として現在も市場価値が高いといった条件は、関係者一同にピニヤ織業の将来を信じさせるに十分だった。まず、開発計画実施に当って組合組織、運転資金、販路、賃金システム、共同作業場、カリボ式の手機、そしてその機に伴う技術、これらすべてが導入された。さらに、「トレレーニング」が連続して実施された。織り、繊維加工、糸結びと全工程にわたって、毎年、外から専門家が招かれていた。製品の市場性を高め、あるいは織り以外の可能性を求めて、刺繍と染めの技術研修もあった。ティビヤオ町ピニヤ生産者組合になってからは、マラポール村時代の失敗がマネージメントにあったという反省から、「チームワークおよび能力向上トレレーニング」も行われている。「トレレーニング」の参加者は、その修了書を額に入れて壁に掲げていた。ピニヤ生産の技術と知識は、「イクスペリエンシャ」ではなく、近代的教育システムによって伝えられたのである。

このことは、組合長の交替にも反映されている。つまり、山地部出身のジェマ・トムリンが組合長に選ばれたのは、彼女がピニヤ織りの発端となった織り手たちの中でも最も優秀で熱心であったためであり、彼女がリーダーとなって

自力更生を行っていくことは、難民となった山地部女性のエンパワメントというもう一つの目的にも適っていた。しかし、二〇〇〇年時点の状況は、彼女の組合長としての能力を問うものであった。組合として利益を上げ、ローンを払い、外部の企業家と交渉して販路を獲得し、その合間に援助財団に申請書を書くといった任務は、こうして、初等教育を修了していないジェマから、首都における大学教育を経験した平地部出身のサルバシオン・ピアンコの手に移ったのである。これらの動きの中心にあるのは、近代的教育システムと専門知識への信奉であり、ビジネスおよび開発産業のコトバを話す能力の優先であった。

マラポール村の織業は、バリ村の土器作りと同様、「貧困世帯(平地部自作農以下)」の仕事であるが、相違点はこれが「主婦」の仕事とみなされていないことである。実際には、織り手たちの大多数は「主婦」なのだが、マラポール村の織業では、「主婦」の語意から来る「補助的」「副収入」という含みがない。つまり、バリ村では、妻たちの土器作りは、夫たちの仕事との補完的な位置にあったのに対して、マラポール村の織業は、開発プロジェクトという投資の対象として始まり、織り手(女性)は高度な技術を持つ熟練労働者として、繊維加工者(男性)の優位におかれた。しかもその収入は、繊維加工者の賃金を大きく上回ったので

フィリピン村落工業における開発の失敗（永井）

ある。バリ村の土器作りは「男はしない」、すなわち選好による区別といわれているのに対し、マラボール村の織業では「男はできない」と語られ、その優位性が能力（織りの技術）に基づいていることが示されている。

しかし、その背景に「食の確保」が絶対的な優先性をもって存在していることは、バリ村もマラボール村も同じである。織物業も他の雇用機会との関係性の中にあり、ピニヤ生産に従事する組合員でも、その胸中には、農業労働で得られる現金収入や米との差し引き計算が常にあった。農繁期、特に収穫期になると、わずかな人数だけが織物業に残り、ピニヤ生産はほとんど停止の状態に陥る。組合が何回かあった大口の取引の申込みに応えられなかったのは、この産業の季節性という問題のため、農繁期にも取引が継続できるかどうかわからない、という事情があったのである。ピニヤ織業も、農業労働、建設労働、都市部への出稼ぎ、サカダ（注3参照）などの選択肢と同等の位置にあった。そして産業におけるコスト計算などというものは、組合員の関心の外であったため、二〇〇二年の賃金引下げは、決定的にピニヤ産業の評価を下げることとなった。そして、ピニヤがだめなら他の仕事へと人々は動いていったのである。

バリ村との相違点には、もう一つ、作業場の違いがある。

土器作りが個々の家の土間で行われるのに対し、織りは「センター」と呼ばれる共同作業場で行われた。この労働環境は、織り手たちにとって必ずしも適切ではなかった。つまり、織り手の大多数は、小さい子供の世話やその他の家事をいつも片手に抱えており、近距離内とはいえ、家の外で八時間も作業に従事することは、彼女たちの生活に葛藤を生んだ。そのため、一五人いた織り手の内、フルタイムで作業できるのはその半数であった。平地部出身の織り手ピクトリアは、小さい子供たちがたくさんいることを理由に、織機を借り出して自宅で作業をしたが、それでもフルタイムで働くことはできなかった。

アンティーケ州の農村は一般に多就業形態をとり、本業・副業の区別はない。土器作りの場合でも、制作時間の長短や品数の多寡は個々の陶工の問題で、週に一五個作る人も、一〇〇〇個作る人も同じ陶工に変わりはなかった。ところが、マラボール村の織り手の場合、作業場が設定され、そこで作業が時間によって測定され、それが「フルタイムの織り手」と「パートタイムの織り手」の区別を作り出したのである。この対比は、農業労働との関係においても見ることができる。大多数の組合員にとって、ピニヤ生産と農業労働は、本業・副業の区別なしに共存するはずのものであったにもかかわらず、開発計画ではピニヤ織業を「フ

ルタイム」とすることを期待していたのである。元の作業場はそれでも織り手たちの家と隣接していたが、新しい作業場は、さらに離れた場所にあるコンクリートの建物で、織り手たちがフルタイムで働ける場として、織りと家事の隔離を固定するものであった。

つまり開発計画は、近代的教育システムによって習得される専門知識、ピニヤ産業内外におけるカテゴリー化、そして、プロダクション（経済指標で測定できる生産活動）偏重でリプロダクション（家事や育児をふくめた生活の再生産活動）をあえて無視する産業化社会の論理といったものを、マラポール村の地域社会に持ち込んだのである。これらは地域文化のコンテクストの中で軋み、組合員によって容易に受け入れられないことから、開発計画関係者および組織の間に失望と摩擦を生んだ。ここには「能率」「生産性」の向上というインペラティブがあり、開発のゴールが、基本的ニーズの充足・利益の公平分配・エンパワーメントを謳いながらも、そこから離れて「量産」「拡大」へと向かうようになったのも当然のことであった。現在、パイナップル栽培は全町域へと拡大し、葉が量産されている。しかし、組合は操業を停止し、カリボや他の地域の織業者が大量に買い付けるということもなく、育てられた葉はどこにも行き場がない。栽培者自身の言によると「収穫せずに

放っておく」「無料ではしい人にあげる」という現状である。たとえ組合の織業がフル操業だとしても、織り手の人数や能力から計算すると、パイナップルの葉はまったくの生産過剰となっているのである。¹⁶⁾

現在、ティビヤオ町では、インターネット上における町のホームページ作成が計画されている。そこでは、ピニヤが町の特産品として紹介される予定であり、さらに、町役場や農業省では、そこから販路拡大ができるのではないかと期待している。しかし、これは電話も普及していないティビヤオ一般社会は関知しない話であり、異なる種類の「知識」の間におけるギャップは、ますます広がっていくようである。

結びにかえて

本論の目的は、開発が二つの異なる文化の遭遇であり、開発の失敗は、計画された変化と地域文化のコンテクストの間に合致または補完性がみられず、開発デイスコースが地域社会に受け入れられないケースであることを、個々の事例を通して示すことであった。その不適合性は、単に技術や組織運営が実用として機能しないというレベルではなく、より深い文化的なレベルでの不適合性であり、参加型

フィリピン村落工業における開発の失敗（永井）

の開発計画プロセスにおいて資金援助、技術導入、人材開発を行ったとしても、それは皮相的な解決案にすぎない。

バリ村土器作りに関しては、筆者は、そもそもこの在来産業が「開発されるべきもの」と位置づけられたことが誤りだったのではないだろうかと考えざるをえない。「農村の貧困世帯の副収入源Ⅱ未開発Ⅱ開発されるべきもの」という想定を作り出したのは、明らかに、産業振興による雇用機会の創出と貧困問題の解消という開発産業が設定した産業の方向性である。これに対してバリ村土器作りは、外からの開発を待つまでもなく、地域社会の動きに対応して持続する力を内包していた。このような産業のありかたに対して、開発計画にはまったく補完性がなかったのである。

一方、マラポール村ピニヤ織りは、その開発の当初の意図とは異なり、パイナップル栽培に主流が移っていく中で、現在、山地部の織り手たち（女性）は平地部の自作農（主に男性）によって、開発の中心から押し出されつつある。かつて織り手たちは、大口の注文に対して「注文を受けない」、つまり、家事や他の関係を考慮せずにフルタイムで働くような労働条件を受け付けないことで、地域文化のコンテキストを主張した。しかし、半年以上操業が停まり、賃金が未払いになると、古い組合員の間にも新しい意見が出てきた。注文をどんどん取り、働いて、それで賃金を多く

もらうほうがいいという利益第一の意見である。これは、近代的教育システムや専門知識、ビジネスなどと同じディスプレイに属する態度ではなかるうか。もしそうならば、これらの人が担う変容した「地域文化」と開発は、補完し合うものとして今後も存続していくのかもしれない。また、ピニヤ産業自体についてもANIADの開発計画査定チームは、果実栽培などの補完的産業があつて初めて、このような零細の地場産業は生き延びていくことができるという意見であつた。ピニヤ織りがパイナップル果実栽培とともに並列して存続していくとしたら、そのとき開発はどのような姿をとるのであるうか。これもまた、筆者の今後の課題として残っている。

謝辞

日本の戦時賠償金については南山大学の吉川洋子氏、カリボおよびフィリピン全体のピニヤ産業については大阪国際大学の小瀬木えりの氏より、ご意見・ご指摘をいただいた。また、PARFUNDのホセ・ノエル・オラノ氏をはじめとするANIADの委託査定チームの方々、筆者が組合活動の評価会議に出席傍聴することを快く許可し、村落開発専門家としてのご意見をきかせてくださった。記して謝意を表したい。

注

(1) 世界銀行は二〇〇一年にも「世界人口の三分の二が一日二ドル以下で生活している」(World Bank 2001, p. vi) という「貧困」の定義を示している。

(2) 平地部の水稲栽培では二期作が主流で、場所によっては三期作も可能である。一方、陸稲では一期作のみで、一九九五年のフィリピン農業省アンティーク局資料によれば、水稲の収量は、一ヘクタールあたり三・四七トン(灌漑および天水栽培)、陸稲は一・五八トンである。

(3) アンティーケ州には、山地部・平地部の対比を示すもうひとつのコトバがある。サカダは一九世紀後半から始まった甘蔗プランテーションへの出稼ぎ労働者であるが、この劣悪な労働条件と搾取システムは、フィリピンの歴史でも悪名高い。従って、サカダはそれ以外の職につけない貧しい人々が選択の余地なく引き受ける仕事として見られていた(eg. Lopes-Gonzaga 1984)。筆者の調査によれば、サカダは山地部村か、あるいは漁村の出身者(山地部に比較すれば少数とみられる)で、水稲栽培を行う平地部農村出身のサカダは稀である。これには雇用代理業者による雇用活動が特定村落で行われたという歴史的事情もあるかもしれないが、ここにも「貧しい」サカダにならなくてもどうか生活していける、「および」「より貧しい」サカダにならないと暮らしが成り立たない」という対比が見られる。この対比は、より正確には、州内における貧困の階層は、「平地部農村」と「その他」の二項対立になっているといえよう。

(4) 一九九〇年にフィリピン厚生省が行ったCIDSSプログラム(資料によると、平地部のI村の住民調査では、一五歳以上

の女性人口一三人のうち六三%が自分の「生業」を「主婦」と答えている。機械化が比較的進んだこの地域では、収穫作業以外に、女性農業労働者が雇用されることはなく、彼女たちに対する賃金相場もない。収穫作業では、男女ともに雇用されるが、両者の間には賃金格差が存在する。一方、同州の山地部S村では、筆者の調査(一九九八)によれば、夫、妻が別個にそれぞれの仕事を回答するのが普通で、「主婦」に相当する回答は一件もなかった。さらに、この地域では農業労働において男女による賃金格差はなく、稲作作業全般を通して、男女両方の労働者に雇用機会が存在する。

(5) 二〇〇三年現在で、零細企業は合計資産が三〇〇万ペソ以下、小規模企業三〇〇万ペソ〜一五〇万ペソ、中規模企業一五〇万ペソ〜一億ペソ、それ以上は大規模企業と規定されている。零細企業は全国の企業数の中、九一%を占めている。

(6) これらの伝統的家内工業は、文化的規制はまったくなく、男女の別にかかわらず誰でも参加できるとされ、文化的規制はまったく見られないにもかかわらず、男性陶工や織り手は稀である。男性陶工や織り手では、本人が自ら希望して技術を習得したということが共通している。

(7) 陶器と土器の相違は、陶土の種類や焼成時の温度、釉薬の有無などにあるが、これらの点から見ると、バリ村の製品は土器の範疇に入る。なお、本論で使用したバリ村資料は、拙稿「フィリピン農村工業における持続性」(二〇〇〇)に詳しい。

(8) バリ村でもマラボール村でも、生産者の組織はassociationで、アンサシオンと呼ばれている。アンティーケ州では、自

フィリピン村落工業における開発の失敗（永井）

己資金で操業している協同組合をコーポラティブと呼んで、未だ自己資金を調達できない段階のグループをアソサシジョンとして前者と区別している。すなわち、アソサシジョンは最終的にコーポラティブになるべき組織なので、協同組合連合AFCCUIの下に組み入れられている。よって、アソサシジョンの邦訳も、ここでは「協会」ではなく「組合」とした。

(9) 農業の機械化によって農業労働の雇用機会が減少し、農業労働から建設労働に転じた。家屋新築、井戸堀、橋建設や堤防などの護岸工事などの日雇いである。

(10) 藁窠計画には、周辺の水田地帯で、藁が安価に購入できること、さらに、バリ陶土の焼成温度が低いため、燃料としては高温とならない藁が最適であることが考慮されている。

(11) カリボ市のピニヤ産業はフィリピン最大のもので、製造業者および卸業者たちは質の向上、商品開発、そして、国内外の市場拡大にしのぎを削っている。地元農家によるバイナツプル栽培および農家の副収入源としての織りという位置づけは、マラポール村とはほぼ同じであるが、産業をコントロールしているのは企業家たちである。カリボ式の手機は、アンティエに残る手機より幅がせまく小型で、織り上がった布を手元で巻き取る仕組みで、使わないときは折りたたんでしまっておけるようになっている。

(12) 繊維加工者では、日に平均二〇〇ペソ（約一〇〇円）、織り手では月に一〇〇〇〜三〇〇〇ペソの収入になったという。織り手以外の賃金は少額であるが、農閑期の仕事のない時期にピニヤ産業によって賃金がもらえることは、世帯收支の上で大きな違いと受け取られている。

(13) 小瀬木えりの氏の御教示によると、アンティエ産のピニヤ

繊維は最上とされる製品で、カリボの「バーストス」、つまりパイナツプル葉の裏からとれる、荒くて、ごわごわした繊維に同等とみられている。この繊維はそれなりの使い道はあるが、カリボの生産者からすれば、伝統的な白い繊細なピニヤ布にはならず、この点でマラポールの織り手たちの見方とは異なる。

(14) 筆者のインタビュによると、過去にレンガ作りを経験した陶工たちは、一様に「レンガは作りたくない」と否定的な反応であった。その理由について、彼女たちの説明は必ずしも明確ではなかったが、造形の楽しみがないことと、共同作業のノルマがあるため自分のペースで仕事ができないことの二つが挙げられる。

(15) エスコバーは、開発産業の成果の一つは開発の専門家を作り出し、「誰が語るのか」を決定することであったという(1995, pp. 45-46)。対するに、地域社会の人々は専門家とはみなされず、「語らぬ」「語る資格のない」位置に押し込まれることになる。マラポール村のピニヤ産業関係者の間では、山地区からの織り手は、彼らこそが伝統技術の継承者であるにもかかわらず、しばしば「無学者」というコトバで呼ばれていた。

(16) ANIADの委託査定チームの査定による。

引用文献

Escobar, Arturo

1995

Encountering Development: The Making and Unmaking of The Third World. Princeton :

- Princeton University Press.
- Ferguson, James
1994 *The Anti-Politics Machine : "Development," Depoliticization, and Bureaucratic Power in Lesotho*. Minneapolis : University of Minnesota Press.
- Fornier, Josefito N.
1997 "Economic Developments in Antique Province: 1800-1850." *Philippines Studies* 46(4) : 407-428.
- Gee, James P.
1990 *Social Linguistics and Literacies: Ideology in Discourses*. London : Falmer Press.
- Hall, Stuart.
1992 "The West and The Rest : Discourse and Power". In S. Hall and B. Gieben (eds.), *Formations of Modernity*. Cambridge : Polity Press.
- Jopillo, Sylvia Ma. G.
1996 *Getting Their Acts Together : NGOs, GOs and POs in Antique Province*. Quezon City : Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University.
- Lopez-Gonzaga, Violeta
1984 *The Sacadas in Negros : a Poverty Profile*. Bacolod : La Salle Social Research Center.
- McCoy, Alfred W.
1982 *A Queen Dies Slowly : the Rise and Decline of Iloilo City*. In McCoy, Alfred W. and Ed. C. de Jesus (eds.), *Philippine Social History: Global Trade and Local Transformations*. Quezon City : Ateneo de Manila University Press.
- Mehmet, Ozay
1999 *Westernizing the Third World: the Eurocentricity of Economic Development Theories*. London : Routledge.
- Nolan, Riall
2002 *Development Anthropology : Encounters in the Real World*. Boulder : Westview Press.
- Philippines, Department of Trade and Industry (DTI)
1995 *Decorative Ceramics Industry Sector Profile*. Manila : DTI.
- Philippines, National Statistics Office (NSO)
1996 *Provincial Profile : Antique*. Manila : NSO.
- Philippines, Province of Antique.
1982 *Profile of the Province of Antique*. n.p.: Province of Antique.
- Philippines, Republic of, Office of the President
2001 *The Medium-term Philippine Development Plan 2001-2004*. Manila : National Economic Development Authority.
- Pieterse, Jan Nederveen
2002 *Development Theory : Deconstructions / Reconstructions*. London : SAGE Publications.

フィリピン村落工業における開発の失敗（永井）

Pigg, Stancy Leigh

1992 “Constructing Social Categories through Place : Social Representations and

Development in Nepal.” *Comparative Studies in Society and History* 32(3): 491-513.

Scheans, Daniel J.

1977 *Filipino Market Poteries*. Manila: National Museum of the Philippines.

World Bank

1999 *World Development Report 1988/99: Knowledge for Development*. Oxford : Oxford University Press.

World Bank

2001 *World Development Report 2000/2001*. <http://www.worldbank.org/poverty/wdpoverty/report/index.htm>.

永井博子

二〇〇〇

「フィリピンの農村工業における持続性—アン
ティーケ州バリ村の土器産業」『東南アジア研
究』三三巻二号、一八五—二二〇頁。

(アテネオ・デ・マニラ大学)

Failure of Community-based Development in Rural Philippines: Unstated Directions and Cultural Incompatibilities

by NAGAI, Hiroko

Development is the encounter of two cultures : the one that development brings about and the one of local society. Failure of development could be explained as cultural incompatibilities between them. Although the universalist notion of progress is dominant in Philippine society as a whole, this incompatibilities are more evident on the microscopic level. This paper examines the unsuccessful cases of development in craft manufacturing of farming villages. What was the change that development really proposed? Why did it not fit to the local context? How did local societies react to it? Although the ethnographic data show the distinctiveness of the process of development in the two industries, development failed in three areas in common. First, it provided educational programs that were designed to train craft-makers to fit into development. The system and its contents, however, had no relevance to, or totally ignored, skills and knowledge that were acquired through the local tradition. Second, the goal of development was the increase of production, and eventually the expansion of industries. It appeared that development presumed that the craft-makers were unskilled, and that the proposal of development was to transform those independent artisans into wagedworkers under a capitalistic industrial structure. Third, the set-up of workshops separated those craft-makers from their daily reproductive activities including food preparation and child-rearing. The emphasis on production over reproduction enforced the principle of industrial society. Nonetheless, development has slowly brought changes into the mindscape of people in one industry while it was rejected according to local culture in the other.